

# 「教職員専用」エレベータ

商学部 教授 中条 潮

いつも学生のような汚い格好をして学内を歩いているものだから、先日、「教職員専用」と記されたエレベータに後ろを向いて乗っていたら、知らない先生に、「学生って平気で乗ってくるよね」と舌打ちされてしまった。

逆に、「顧客より従業員を優遇しているなんておかしいよな」という、学生の批判が耳に入ってくることもある。

教員が学生より優先されるには理由がある。

第一に、じいさんばあさんが多い教員は、エレベータから得られる効用が学生より大きい（塾長のように、健康上の理由から階段を使う人は別だが）。

第二に、教員が優先されないと、外部不経済が発生する。学生が授業に5分遅れても、損失は「遅れた学生の数×5分」であるが、教員が遅れると、「出席している学生の数×5分」のロスが発生する。つまらない授業でない限り、後者は前者を上回る。つまらない授業は慶應にはないから、教員を優先するのは資源配分上の根拠がある。

なお、前記があてはまるのは混雑時間帯だけで、限界費用がゼロの閑散時間帯にはむしろ学生の使用は望ましい。

しかし、こういった規制は、エレベータの前で守衛さんに見張っていてでももらわなければ、有効には実施できない。その管理コストは、規制による資源配分は正効果よりも明らかに大きくなるだろう。だから、せいぜい、「教職員専用」という貼り紙でもしておくにとどめるのが落としどころではある。

ただ、貼り紙だけでは、現状のとおり、まったく効果はない。守らせられない規制は、学生の遵法精神を損なわせ、教員側には蘊気を生じさせるだけである。書いてあるのに守らないと、書いてない場合以上に腹がたつ。

しかし、しかし。この「教職員専用」という貼り紙は、身近でわかりやすい規制例なので、私は、公共政策の授業の格好のネタとして、もう20年近くも活用させてもらってきた。だから、やはり、あったほうがよい。



談話室

教員によるエッセイコーナー